

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第28号
平成23年3月31日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)352-7331
発行人字 竹内 宏
編集人 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (054)352-2188

「富士のよく見える部屋を」 鐵齋の清水

次郎長の最後をみとった三代目おちようの子孫入谷家に伝わる一枚の扁額。船宿末廣に泊まった見知らぬ客が、描いた富士の絵には、巨匠鐵齋の署名が残されている。その由来をたずねて行くと、意外な事実につづかった。

三代目おちようさんの子孫、入谷家の居間に一枚の富士山を描いた扁額が飾られている。これから述べるお話は、この一枚の扁額についてである。次郎長が亡くなってから何年か後のことである。ある日、波止場の船宿末廣に一人の絵師が泊まった。このお話はそこから始まる。

船宿末廣は平成十三年に港橋畔に復元され、今年で十周年となる。節目に相応しいエピソードと



富岡鉄齋肖像

して書き留めておきたい。

次郎長には実子がなかったため、三代目おちようの姪に当る「おけん」を養女として入籍し山本長五郎の後継者とした。明治九年生れ、愛知県知多郡乙川村土族山下燕八郎二女で、清水の地元では、波止場のおけんちゃんと呼ばれていた。

次郎長の家族はそれだけではない。主婦のおちよう、養女のおけんのほか、入谷清太郎・はる夫妻、その子麟助などの大家族だ。三代目おちようは次郎長のもとに嫁す時、先夫との間に生れた幼い男子を連れてきた。それが入谷清太郎であり、長じていとこのはると結婚、孫が生れた。晩年の次郎長はそのような大家族に囲まれ、鉄を持って畑仕事をしたり、近所の子どもたちを集めて相撲を取らせたり、好々爺として幸せに過ごした。

明治二十六年六月十二日、次郎長は七十四歳で

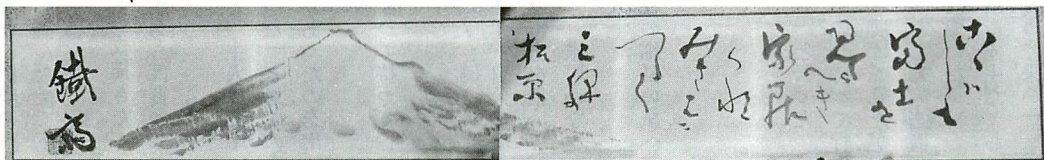
波乱の生涯を終えるが、その後、船宿末廣の経営は、おちよう夫人とその家族たちの手で守られた。

次郎長の遺品も、おちようさんと家族たちによって守られた。後継者の山本けんは大正十年、独身のまま亡くなったので、おちようの実子である入谷清太郎、孫の麟助さらにその後継者の入谷家によって遺品は守られてきた。愛用の刀剣類、喧嘩出入りの時に身につける胴着、賭博の道具など梅蔭寺の銅像前にある次郎長遺物館に陳列されているものの殆どは入谷家に残されて寄進されたものだ。

清水で鉄齋展

今から十年程前、フェルケール博物館と清水市教育委員会の主催で鉄齋展が催されたことがある。その図録には、富岡鉄齋が生涯訪れた日本全国の土地が図示されている。北海道から九州まで百か所は優に超える土地の中で、「清水」の名だけが、地元らしくきわ大きい活字で図示されていた。また、年譜には、明治三十四年鉄齋が清水を訪れたと記されている。

私は絵の由来について調べてみることにした。すると、本田成之



入谷家所蔵の扁額

著、大正十五年刊『富岡鉄斎』の中で、次のように書き出されている箇所に出会った。

「いつの旅の時であったか駿州清水港の波止場にあった当年の俠客次郎長の家で、今は其遺族がいた所へ先生は泊り込んだのである」

宿の主人は鉄斎先生とは知らず、所望されるままに富士のよく見える座敷に通した。何か紙をと命じられるままに持って行ったところ、さらさらっと富士を描いた。その落款を見て主人は腰を抜かすほど驚いた。今を時めく鉄斎ではないか。

そういったエピソードが本田本の『富岡鉄斎』には紹介されている。本田成之といえは鉄斎研究では第一人者である。



左から山本ちょう、山本けん、小島茂、入谷はる、清太郎

私は、鉄斎展の記念講演会の講師に宛、鉄斎の清水来訪について問い合わせの手紙を出した。

村松梢風が先

返事はなかった。月日のたつのは早いもので、それから十年の歳月があつたという間に流れた。最近になって私は、「富士の見える座敷に通してもらいたい」と鉄斎が訪ねてきたという本田成之が書いたエピソードとそっくり同じ内容の文章に出会った。

それは単行本ではなく、月刊誌「中央公論」の大正十五年七月号にのった村松梢風の「富岡鉄斎」である。

サブタイトルに「本朝画人伝の十三」とうたった梢風の論文は三十二頁にわたる鉄斎の伝記だが、そのうちほぼ一頁くらいが、「富士の見える座敷を」のエピソードで占めている。

内容は本田成之本と殆ど同じだ。どちらが先か、改めてみると、中央美術社刊の「本田成之著富岡鉄斎」は大正十五年三月十五日発行、対して村松梢風の「富岡鉄斎」をのせた「中央公論」は大正十四年七月号であり、明らかにこちらが先ということになる。以下「中央公論」の村松論文から該当箇所を引用しよう。

「駿州清水港の波止場にある俠客次郎長の家では、次郎長の死後遺族の人達が小さな宿屋を営んでいた。ある年のこと、此の次郎長の家へブラリとやって来て泊り込んだ得体の知れない老人があつた。

「富士の見える座敷へ泊めて貰い度い」

と云ふので奥二階の富士を真正面に見る座敷へ入れると、客は廊下へ出て頻りに感嘆の声を発していたが、やがて食事も済んだ後で下女に向かつて

「余り富士が美しいから絵を一枚描きたくなつた。主人にそういつて紙があれば貰つて来てくれ」といつけた。

下女が下へ行つてそう云ふと、主人は心中「また乞食絵かきか泊りやがった」と思ふので、唐紙の裁ち屑が二枚ばかりあつたのを出してきて

「こんな紙でも宜しければと云つて持つて行きなよ」

と云つて下女に持たせてやつた。すると二階の老畫師は別にいやな顔もせず、自分で墨をすつて、一枚へ三保の松原と富士を描いて、ここはしも ふじをみるべき 家居かな 松原遠く波しづかにて

と賛をした。それからもう一枚の細長い紙へと賛をした。一枚不可無

と草書で書いて、名前へ印をして「これを御主人に上げてお呉れ」と云つた。

下女が其の二枚の書畫を主人の處へ持つて行くと、主人は小馬鹿にしながら展げて見たが、「鐵斎」といふ落款を見て喫驚りした。當時は既に鐵斎の名は国中に知られていた。

「さあ大変だ。これあ京都の鐵斎先生だ。おい誰か早く唐紙を十枚ばかり買って来い」大急ぎで人を走らせて唐紙を買つて来て、今

度は主人が羽織を着て挨拶に行つて「どうかもう一枚」と云つて紙を出したところが、鐵齋はもはや笑つていて描かなかつた。

次郎長の家では、これを二面の額に仕立てて大切に保存している。

次郎長の遺族が嘗む船宿に訪れた一人の見知らぬ泊り客が、実は巨匠鉄齋で、富士を描いた二枚の絵を残していったというこのエピソードを書いた村松梢風は、いうまでもなく直木賞作家村松友視氏の祖父、正伝清水次郎長の作者である。昭和ヒトケタ生れの私を通つた岡小学校の登校路に近い所に梢風は住んでいたの、その名に私は強い親近感を抱いている。

エピソードの中に、富士の絵の賛として、「ここはしも ふじをみるべき家居かな 松原遠く波しづかにて」と記されている。実は冒頭のさし絵写真に見るように、入谷家にある扁額の賛は違う言葉になっている。十年ほど前、扁額の写真を林清見さんに見せ、解説していただいた。それは次のようであつた。

ここはしも富士を見るべき家居かな

みぎはにつづく三保の松原

賛の上の句は、梢風の記事と同じであるが、下の句は全く違う。記事の末尾にもあるように、どうやら絵は二枚あつて、「みぎはにつづく三保の松原」と賛をした方の扁額が残されたらしい。

ところが、初出の中央公論大正十四年七月号の村松梢風「富岡鉄齋」は、後に平凡社から出版の「本朝画人伝(上)(中)(下)」（昭和八年刊）に収録された。中央公論大正十四年七月号は、都立中



大正15年、騷人社発行

央図書館でようやくコピーすることができたが、平凡社の「本朝画人伝」は地元の清水中央図書館で簡単にコピーできた。それには、賛の下の句の部分だけが、「みぎはにつづく三保の松原」と訂正されていた。梢風は恐らく二枚あつた両方の絵を見たにちがいない。

大正六、七年の村松梢風

梢風は大正六、七年頃、清水港波止場の船宿末廣に二か月ほど間借りしていた、と自らの回顧談に記している。次郎長の遺族たち、入谷家の人たちとのつきあいはその前からだったとも記している。中央公論大正十四年七月号に「富岡鉄齋」を書いた翌年の大正十五年、梢風は自らの個人雑誌「騷人」を発行していた(さし絵参照)。その第一巻第二号(五月号)の編集後記に「次郎長」余談と題して、大正六、七年のことを書いている。

大正六、七年といえば、明治二十二年生れの梢風は二十八、九歳。三代目おちようは大正五年に亡くなっているからもういない。梢風は泊まり客ではない。二か月間を「間借り」したと書いている。その家族たちは、四十歳代のおけんさん、先

にもふれたように、この人は三代目おちようの姪で養女として入籍している。さらにおちようの実子入谷清太郎、大正六、七年には五十歳を超え、長男の麟助は会社づとめをしていた。梢風はおけんさんのことを「色の黒い無骨なきりようをしていたが、気性は親譲りのサツパリして男みたいな人だった」と書いている。船宿末廣としての旅館は廃業していたようで、梢風は「この家の人たちと前から知合いだった」と書いている。

鉄齋が「富士の見える部屋を」といって訪ねてきたのは、何年の時かわからない。私は鉄齋展図録の年譜にあるように明治三十四年、鉄齋が三保の羽衣松や鉄舟寺を訪れた時だと推定している。鉄齋がふらつと泊り客として現われた時、応対した宿の主人は入谷清太郎である。梢風は、大正六、七年の秋、間借りしている時にこの人たちから話を聞いたにちがいない。それから七、八年たつてから、大正十四年七月号の中央公論に本朝画人伝十三として発表したのである。

私は初め、梢風の書いていることも知らず、大正十五年に本田成之が書いたものを読み、この話が鉄齋自身の側から出たものだと思つていた。なぜなら、本田成之は長尾雨山などと共に、鉄齋の終焉の場にも身近におり、日頃回顧談を聞きやすい立場にいたからである。しかし、この話を先に書いたのは、梢風だ。中央公論の追記を読むと、梢風は鉄齋に会っていない。

富士の見える間で描かれた扁額の絵の証人は、船宿末廣を守つていたおちようさんの子孫たちということになる。(T)

黒駒勝蔵と清水次郎長友好の旅

山梨県笛吹市
御坂町を訪ねる

黒駒勝蔵と清水次郎長が最後に闘ってから、五十年の歳月が流れたといえます。

生涯のライバル同士の怨讐もこの間に流れ去り、勝蔵の子孫小池英行さん一族や地元の方がたとの友好の旅に、清水から三十二名が参加して、平成二十二年十一月二十三日二十四日、石和温泉一泊で行われました。



平成22年11月23日、山梨県御坂路黒駒勝蔵墓前で

清水でも何年前か前、梶原景時一族の法要に、義経ゆかりの薄墨の笛の奉納演奏が行われたそうです。景時と義経の冥福を祈る笛の音は、八百年の時空をこえて響いたことと思います。

さてバスの中では勝蔵の子孫小池英行さんが書いた「黒駒勝蔵小伝」をもとにその生涯の説明を聞き、勝蔵について知ることができました。

その後は竹内宏会長による経済談義が始まりました。塩の道、富士川水運による昔からの清水と甲府との深い関係、水晶の加工技術をもとにする装飾品の町山梨県、印伝、印鑑、硯石など、楽しく聞くことができました。

いちばん印象に残ったのは、上海万博についての知られざるエピソードです。バスに乗る時配布された資料に平成二十二年七月五日の朝日新聞のコピーがあり、それによると、上海万博生みの親は竹内宏氏だということです。二十六年前の昭和五十九年、旧長銀の現役時代に訪中し、会談した王副首相らに大阪万博の成功例を強くすすめたといえます。上海市はその恩義を忘れず、昨年九月、竹内会長の誕生日に、ご夫妻を上海万博に招待したそうです。最高のプレゼントですね。竹内会長に乾杯!! ちなみに日本館の秋岡栄子館長は、当会の運営委員です。

予定通り昼前に、勝蔵ご子孫の経営する御坂路農場に到着しました。

「勝蔵翁の墓」の前で一同記念撮影の後、竹内会

長と小池さんが固い握手を交わし、友好を深めました。ドライブイン御坂路でほうとうの昼食。次いで同じ御坂路町にある県立博物館に向かいました。ここでは勝蔵の史実について学芸員から詳しい説明をしていただき、紅葉の最高の中で、石和温泉のホテル八田に到着。ワイン風呂で疲れをとりました。

翌二十四日は、ぶどう寺で知られる大善寺の薬師如来を拝観しました。国宝の薬師堂は山梨県最古の建物で、数多い文化財を拜見できました。

午後からは運営委員の林岡成さんが前もって連絡して下さった向嶽寺に向かいました。国宝の達磨図（本物は東京国立博物館に寄託）は日本最古級だそうです。もともと南禅寺派だったこの寺は明治時代に独立し、臨済宗向嶽寺派の大本山になりました。

山門前の小さな公園には、童謡「花かげ」の碑があります。作詩した大林主計がこの地の出身のため建立されたとのこと。

私たち一同は、碑の前で少女時代にもどって大きな声で合唱しました。気がついたら和尚さんたちがニコニコして私たちを見ていました。

最後に、日本三奇橋の一つとされる猿橋の見学です。甲州街道に現存する唯一の橋とのこと。

会長と東京に帰られる方とは、大月駅でお別れし、バスは帰路につきました。

二日間晴天に恵まれ、美しい紅葉の中、いつも心に残る旅行で素晴らしい体験をさせて頂き感謝します。次回も楽しみにしています。

(天野香)